

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

2019年4月30日発行
戦史館事務局〒029-4427
岩手県奥州市衣川陣場下
41番地盤オフィス花岡
編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩渕 宣輝 専務理事 小原 守夫 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

戦史館ホームページが生まれかわりました。

昨年9月の通常総会で、戦史館の資料や展示物を、次の世代にどのように継承していくのが良いのか…このむずかしい課題に具体的に取り組もうと確認しました。予定より少し遅くなりましたが、その対応策の一つとして、今までのホームページを一新し、多くの人に訪れてもらえるようなウェブサイトが3月にできあがりました。

若い人にも関心を持ってもらえるように…遠い岩手の戦史館まではもう足を運べない方も、展示資料をありありと閲覧できるように…これまでの活動の流れ全体をおさらいできるように…初めて訪れる人が事前に基礎知識を得られるように…様々な期待を込めて内容を見直しました。戦史館だよりでお伝えした記事を素材に再編集し、説明を補うように、現場の写真もたくさん挿入しました。何ととっても、ウェブ制作専門家の技術をお借りしたことで、見やすい“デジタル戦史館”がスタートしました。

メールアドレスがわかる会員の方には、すでにご案内していますが改めてこの紙面で内容を紹介します。『特定非営利活動法人太平洋戦史館公式サイト』は <http://www.ww2museum.jp/> と入力してください。



スマホをご利用の方は戦史館ウェブサイトのQRコードの読み取り⇒が便利です。ホーム表紙のページから「太平洋戦史館の願い」「戦史館だよりバックナンバー」「戦史館の主な活動」「常設展示室」「戦史館来館ご希望の方へ案内」「入会案内」「代表 岩渕宣輝」の各ページを閲覧できます。戦史館への問い合わせは「電子メール送信フォーム」をご利用いただくと便利です。

戦史館が目ざすもの 私たちの願いは…

ウェブサイトのホーム表紙には、戦史館の外観イメージと“忘るまじ 語り継ごう次の世代へ プラスの交流を”と、会報でもおなじみのスローガンを掲げています。

“忘るまじ”は、主にインドネシアパプア州、西部ニューギニアの旧戦地に残された兵士たちの遺骸搜索と遺骨帰還活動。“語り継ごう次の世代へ”は、常設展示や講演活動を通じて実践しています。ウェブだからこそ多くの若い方々に、戦史館の活動や展示を知ってもらいたい。70数年前の戦争と今が繋がっていることを、理解してもらいたい。“デジタル戦史館”をその第一歩にしたい。今、世界中に差別や偏見が台頭し、対立の時代と言われていますが、“プラスの交流”の戦後処理活動を通じて『避戦』（戦争を積極的に避ける）を実践できれば、それは新たな戦争に加担しないためにとっても大切なことです。

ウェブで、戦史館だよりのバックナンバーにも目を通してください。2015年4月30日発行の100号から最新116号までを閲覧できます。会員の皆さんに郵送している紙媒体は、モノクロ印刷ですが、ウェブ掲載画像の写真はカラーです。

戦史館の主な活動 その流れが わかります。

「主な活動」のページでは民間の太平洋戦史館が、その会員が、なぜこの活動が続けてきたのか詳しく紹介しています。分量が多いので、最初の目次を参照していただくと、これまでの活動の流れがつかみやすくなります。戦跡巡礼、未帰還兵の調査と搜索、厚労省委託の情報収集事業、さらに政府派遣遺骨帰還まで、詳しい解説と写真を掲載しました。

次に、戦没者遺骨が帰還した後、どんな問題が待ち受けるのか一緒に考えてください。

「戦史館の主な活動」ページ後半では、千鳥ヶ淵戦没者墓苑の現状はどうなっているか？ 現地の戦跡に作られた慰霊碑は今どうなっているか？ 外国では戦没者の国家儀礼はどのように行われているか？ など、疑問ばかりが続きます。ウェブ最後のページに「代表岩渕宣輝プロフィール」がありますが、岩渕の提言としてこの問題を取り上げました。戦史館だより94号に掲載した内容ですが、この提言もあわせて目を通してください。

常設展示室 遺留品 資料紹介



遺留品が大切なのは、それらがしばしば白骨化した戦没者の遺骸のかたわらで発見されるからです。遺留品が日本軍の官給品であれば、その遺骸が日本兵である可能性が高くなります。水筒や飯ごう、万年筆などに名前が刻まれていて、その筆跡から個人が特定されれば、持ち主の遺族にお返しすることもできます。展示室のページでは、たくさんの遺留品の中から、持ち主が見つかり、遺族にお渡しできた遺留品として、野々口さんの水筒、藤井さんの剃刀、大滝さんの飯ごうのフタを紹介しています。他にも名前がわかっていて、持ち主を捜している遺留品と、遺留品に刻まれた名前一覧を紹介しています。心あたりの方から問い合わせが来ることを願って。



戦場に残された危険物の一部を紹介します。

「ルービンリキ」のガラス破片、手榴弾、弾薬も展示しています。子供たちがはだして駆け回ることができる安全な環境に戻すことは戦後処理問題の重要な課題だからです。

日本軍が発行した10ドル軍票 TEN DOLLARS も展示しています。軍票の下段の中央部分に右書きで「府政國帝本日大」の文字が漢字で印刷されていますが、実物では小さすぎて読みにくい、しかし画面で拡大してみると鮮明

に読み取ることができます。この軍票を持参すると10ドルに交換できると約束されている英文の箇所も拡大してみてください。実際には、軍票は米ドルに交換された実績が一度もないまま戦後は紙屑となりました。

ウェブの常設展示室では戦場を描いた絵画なども紹介していますが、スタートしたばかりの今はまだ掲載した展示は一部です。今後3カ月に一度くらいの予定で更新し、徐々に掲載する展示物を増やしていきます。更新は表紙の What's New の欄で確認できます。

インドネシア遺骨帰還 覚書 調印 間近か？

2月に発行した戦史館だより115号では、インドネシアと外交交渉を続けている外務省の経過報告として、衝撃的な事実2点をお伝えしました。

☆衝撃その1 外務省が、戦史館や推進協会へ事前に何も知らせずに（厚労省へは直前に通知し）秘密裡にパプア州4つの市の行政責任者を招待したこと。外務省のホームページには、一同が会した写真だけが掲載されたものの会談の中身は一切公表されなかった。

☆衝撃その2 佐藤外務副大臣がビアク市を訪問し、パライ海岸の慰霊碑に献花したが、一番訪問すべきは隣接のスピオリ市なのに、スピオリを訪問しなかったという事実。外務省では2015年の遺骨帰還がなぜ失敗したのか、その原因が隠されたまま問題が放置されているので、誰も副大臣にスピオリ訪問を提言しなかったこと。

2011年に初めて外務省を訪問し、遺骨帰還協定の交渉を続けていた外務省の担当者との会話を思い出しました。「延々と交渉を続けて進展がないなんて、一体何回？どんな交渉としてきたのですか？」と質問すると担当は記録を数えてから、胸を張って「はい24回です」という答えが帰ってきました。今も次の二国間の協定調印と遺骨帰還の再開に向けて外交交渉は延々と続いているようですが、あの体質は今も変わらないようです

厚労省は外務省の交渉結果をひたすら待つばかり。外務省は「外交交渉の途中であり、機微に触れることなので…」とひたすら「よろしむべし、知らしむべからず」（翻訳するとシモジモは余計なことは考えなくてよい。黙ってオカミの言うことを聞けという感じ）という態度に、厚労省外務省との会議を要請し、2月、3月、4月、毎月日帰りで霞が関へ押しかけ、外交交渉に変化があるときは、少しだけ報道発表も入るようになりました。

6月のG20（ジ・トゥエンティ）大阪サミットで？

外務省、厚労省、推進協会、戦史館、4月18日の会議でわかったのは、二国間の条約締結は6月28日～29日に開催される主要20カ国の首脳が集まる経済と金融の国際会議が大阪で開かれるその折り。来日するインドネシア、ジョコ大統領と安倍首相の間で最終的に締結されるのだそうです。日本はG20の議長国なので“おもてなし”の精神で日本をアピールする機会なのだから。首脳間の署名は最終段階のセレモニーですが、その前に内閣法制局の審査があり、その前に閣議決定され、その前に条約としての体裁を整え、その前にまだまだ膨大な準備が続くようです。国際約束は、英語、インドネシア語、日本語で表記されるのですから両国とも調印式という締め切りに間に合わせるために必死だそうです。では、条約が締結されれば、すぐにスピオリの120柱が帰還できるのでしょうか？

☆衝撃その3 調印から実施まで最短でも6ヵ月が必要というのです。署名されれば即発効となるのが国際約束のはずですが、インドネシア側の事情で、これまで繰り返されてきた説明と同じことが繰り返されています。パプア州各市への協力要請に時間がかかる。住民への配慮と補償が必要。無人島でも考古学者の事前調査が必要など。インドネシア側の対応は今までどおり変わらないようです。条約の中に、日本からの経済協力等の条項がないことも気掛かりです。これで遺骨帰還を促進することができるのでしょうか？